

# 千葉市鎌池第一・第二遺跡採集の石器

小林 清 隆・橋 本 勝 雄

## はじめに

ここに紹介する資料は、小林が昭和50年代後半から60年代頃に採集した資料の一部である。そのころ小林の自宅周辺は、いたるところが畑で、多くの農家では野菜や落花生、サツマイモなどを栽培していた。1年の中で耕作されていない期間は、年末から春一番の直後くらいまでの短い間であったと記憶している。当時、耕作の邪魔にならないこの期間に、畑を歩いて遺物の採集を行っていた。今回は載せていないが、もっとも多く発見した遺物は石鍬で、石斧などは目に入る機会がなかった。また、わずかな縄文土器を採集しているが、こちらは保管場所が不明になっている。

長年にわたり、ただ単に収蔵していただけただけの遺物の今後を考えると、一度資料紹介を行いたいと思っていた。しかし、紹介を予定している旧石器について、観察できる力量がないので、石器研究を追究している橋本勝雄氏に資料を実見してもらうことにした。橋本氏からは、石器について詳しい解説を受けるとともに、資料紹介に協力を頂けることとなった。採集地点が遺跡として未周知であり、近辺で旧石器時代の石器があまり知られていないので、紹介する意味もあるだろうと思った次第である。

なお、執筆については、「はじめに」と「1 遺跡の位置と周辺の環境」を小林が行い、それ以降を橋本氏にお願いした。

## 1 遺跡の位置と周辺の環境

周辺の遺跡については後にふれるとして、仮称鎌池遺跡の位置について述べておこう。遺跡は千葉市若葉区若松町に所在する(第1図)<sup>1)</sup>。千葉市若葉区は千葉市の北東部を区域とし、区の北西端部に総武本線の都賀駅が所在する。都賀駅を南西方面に上ると千葉駅に至り、下って北東方面に向かうと四街道駅に至るJRの路線である。都賀駅と四街道駅の途中には「東金御成街道」が直交するように交差する。東金御成街道は、1613年に徳川家康が土井利勝に命じて整備させ

た、船橋～東金間の全長約37kmの街道として知られている。現在は若葉区に陸上自衛隊下志津駐屯地が展開するため、途切れた状況になっている。先ほどの御成街道と交差する総武本線の踏切と自衛隊駐屯地を囲む壁までの間に、県道千葉・臼井・印西線がとおっている。その交差点付近に、かつて池が存在し、その形が鎌の形に似ていたため、字名が「鎌池」になったといわれている。小林は年少のころ、明治時代生まれの祖母や近所の古老から、池の周囲に桜が咲くころは実に美しかった、というような話を聞いたことがある。なお、この字名の由来については、本保弘文氏の御成街道を研究された著書に詳述されている(本保2000)。今回の資料は、かつて存在していた鎌池の北と南を歩いた際に発見し、現在でもバス停名や交差点などに使用している字名なので、それに因んで未周知の遺跡につけたものである。

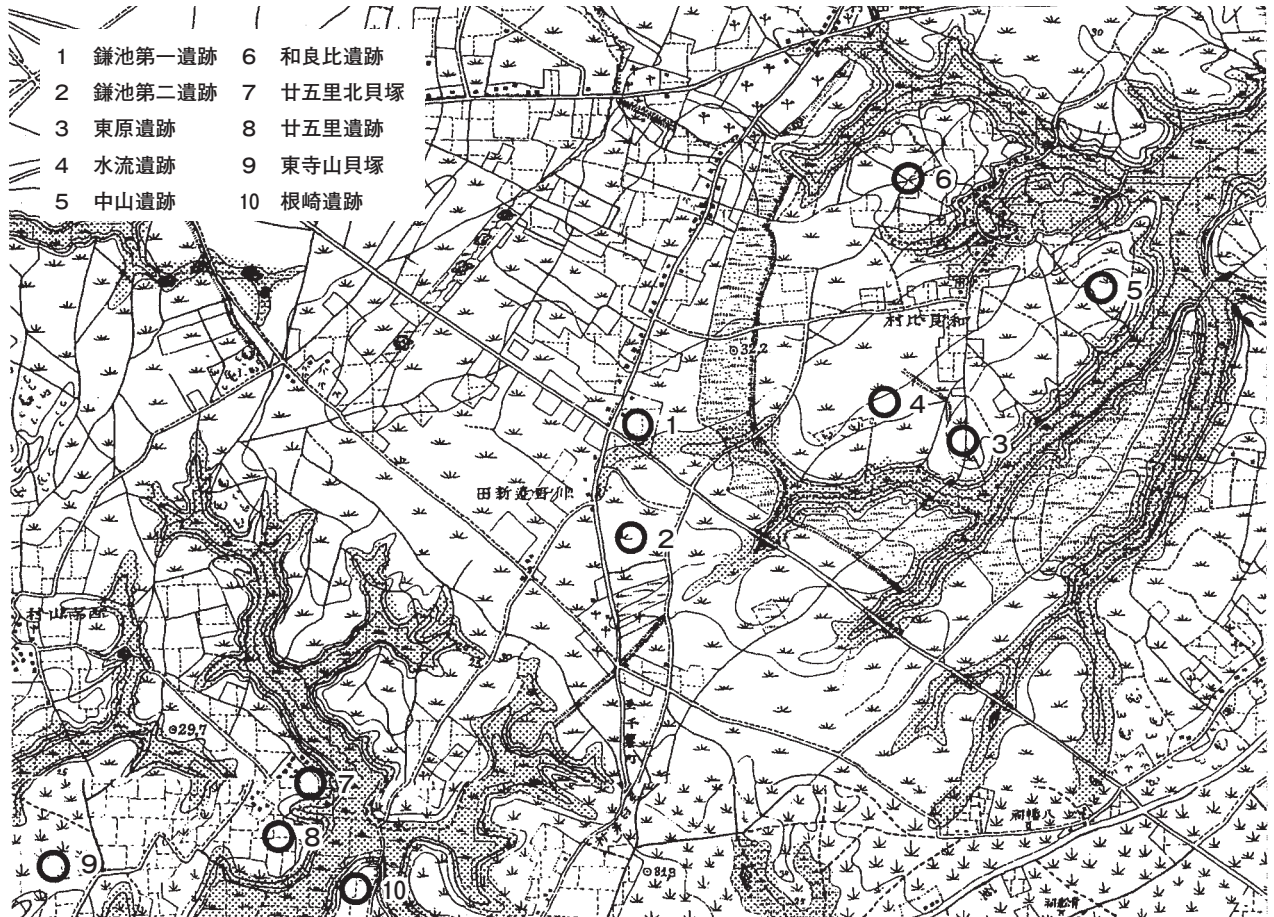
小規模ながら春には水面に桜の花びらを浮かべていたという鎌池は、現在では平坦になるまで埋め立てられ、住宅地や温泉施設などに変貌し、採集したころの景観をまったくとどめてはいない。遺物を集めていた当時は、それでも浅い谷の形跡が所々に残っていた。鎌池第一遺跡(1)とした地点は、鹿島川の支流である小名木川(物井川)にかかわる1支谷の最上流部北側斜面部から平坦部にかけて展開する。ここでは石器以外に縄文土器も採集することができた。鎌池第二遺跡(2)は、小名木川につながる2条の谷の間に広がる平坦部に拡がるとみられる。両遺跡の標高は30m前後である。遺跡の西側には東京湾水系に属する霞川にかかわる支谷が入り込んでくるので、両水系の分水界ともいえそうだが、位置的に鹿島川水系とするのが妥当であろう。

現在までに遺跡の近傍で、調査が実施された地点は存在しない。やや範囲を拡大してみると、鎌池第一遺跡の南側の谷を下って四街道市域に入った谷の北側に、宅地造成に伴い調査された和良比の遺跡群が所在する(渋谷ほか1989、斉藤ほか1991)。第2図<sup>2)</sup>の東原遺

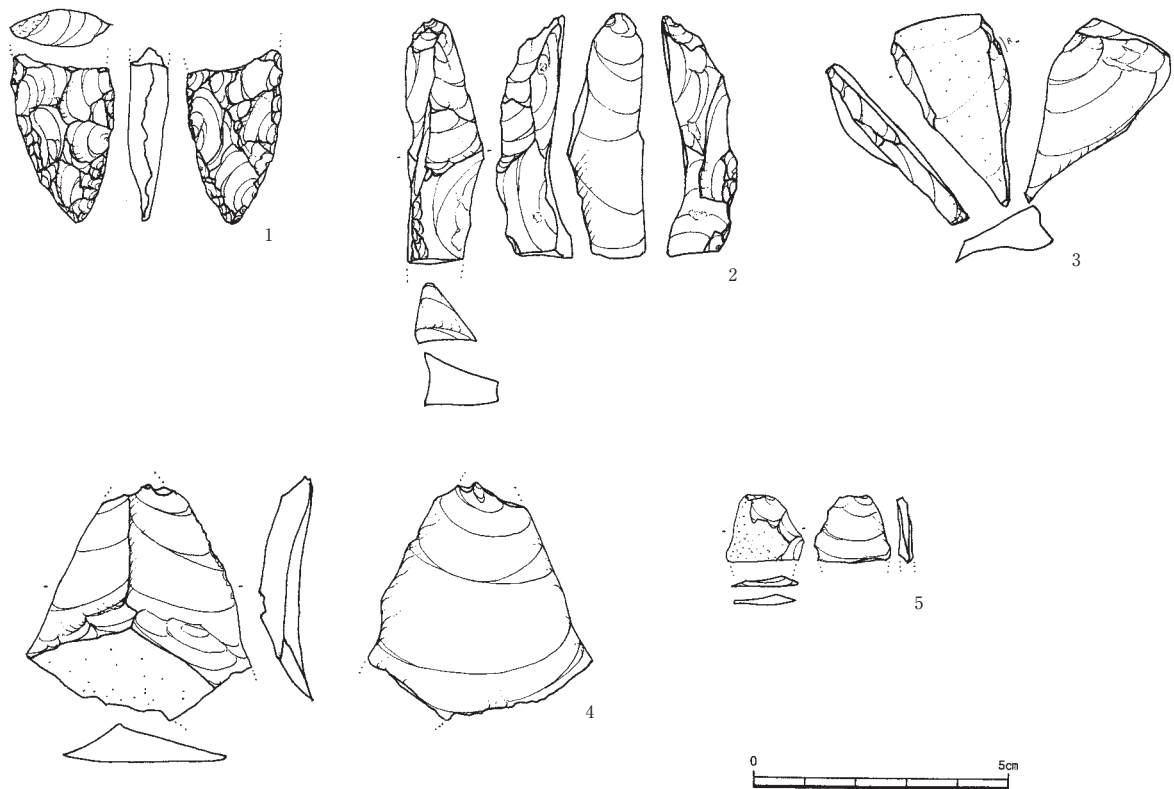




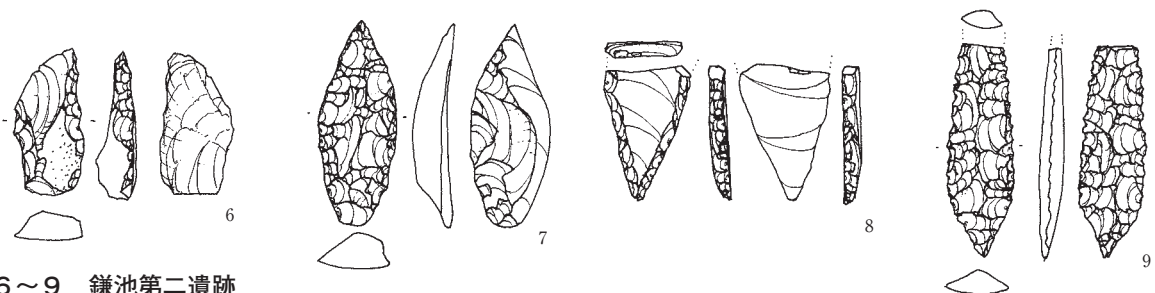
第1図 遺跡の位置 1：鎌池第一遺跡 2：鎌池第二遺跡



第2図 周辺の遺跡



1～5 鎌池第一遺跡



6～9 鎌池第二遺跡

第3図 鎌池第一遺跡・鎌池第二遺跡石器実測図

跡（3）では、下層からナイフ形石器や剥片が出土したほか、上層では茅山下層式期の炉穴が発見されている。近接する水流遺跡（4）では、前期と考えられる土器片が出土したのみであった。中山遺跡（5）の調査では、加曾利E式期の竪穴住居が検出され、その時期の集落の存在を明らかにした。旧石器時代の資料は、頁岩製のナイフ形石器や剥片が出土している。広範囲にわたる発掘が行われた和良比遺跡（6）では、遺跡の縁辺部に沿うように、立川ローム層のⅦ層～Ⅲ層にかけて石器集中地点が発見されている。また、表採や耕作土中に入った尖頭器やナイフ形石器などが報告されている。

一方、東京湾水系の葎川が刻んだ谷の奥部は、貝塚が近接して分布する地域として知られている。著名貝塚を伴う遺跡は、廿五里北貝塚（7）、廿五里貝塚（8）、

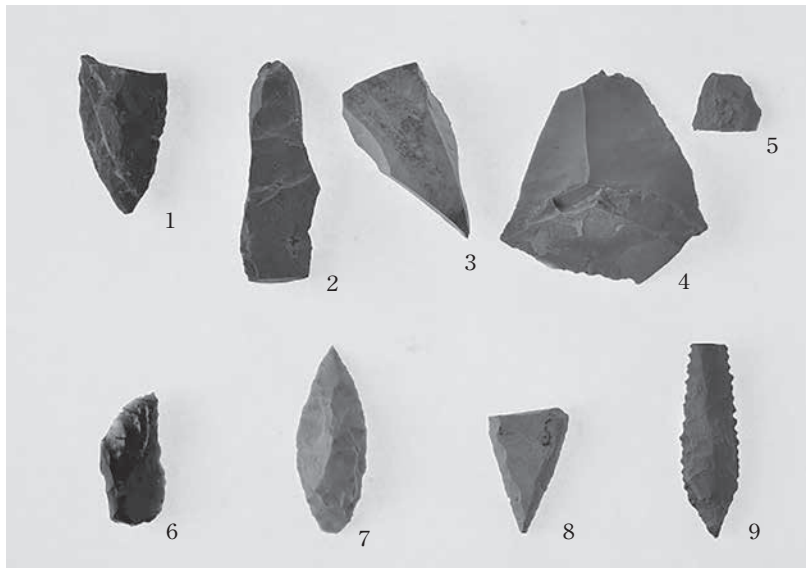
東寺山貝塚（9）などの主に中期に営まれた遺跡が有名である（古内2000）。さらに時代が下って根崎遺跡（10）の周辺では、古墳時代から奈良・平安時代の規模の大きな集落が存在する（湖口1997）。

## 2 資料の紹介（第3図）

今回紹介する資料は石器9点である。内訳は旧石器時代の石器8点と縄文時代草創期の石器1点となっている。いずれも採集品であるため、資料の時間的な位置づけについては、型式学的な見地から判断せざるを得ない。なお、本稿の時期区分については、下総編年（田村・橋本1984）に準拠したことをあらかじめ明記しておく。

第3図1～5は第一遺跡で採集された資料である。1は木葉尖頭器の基部破片である。チャート製で両面





1～5 鎌池第一遺跡

6～9 鎌池第二遺跡

第4図 鎌池第一遺跡・鎌池第二遺跡石器写真

加工である。大きさは長さ3.3cm、幅1.9cm、厚さ0.8cm、重さ4.65gを測る。当該資料については部分的ではあるが、技術及び形態的特徴から旧石器時代終末期（下総Ⅲb期）の「本ノ木型尖頭器」の可能性が高い（橋本2020）。2は稜付き剥片としたが、断面が不整三角形を呈していることから彫刻刀面ないしは槌状剥離面の作出の際に生じた削片の可能性もある。石材はガラス質黒色安山岩である。大きさは現存では、長さ4.7cm、幅1.5cm、1.4cmとなっており、先端部が欠損している。3は二次加工ある剥片である。打点付近で縦折れした横長剥片を素材としており、折損面に部分的な二次加工が施されている。石材は珪質凝灰岩、大きさは長さ2.5cm、幅4.1cm、厚さ0.8cm、重さ5.73gを測る。4は横長剥片（長さ4.4cm、幅4.4cm、厚さ0.7cm、重さ11.43g）、5は削片の欠損品（長さ1.3cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.53g）であり、ともに硬質頁岩製である。当該資料は下総Ⅱc期に登場した有槌尖頭器の関連資料であり、4についてもその可能性が高い（橋本2017・2018）。

第3図6～9は第二遺跡で採集された資料である。

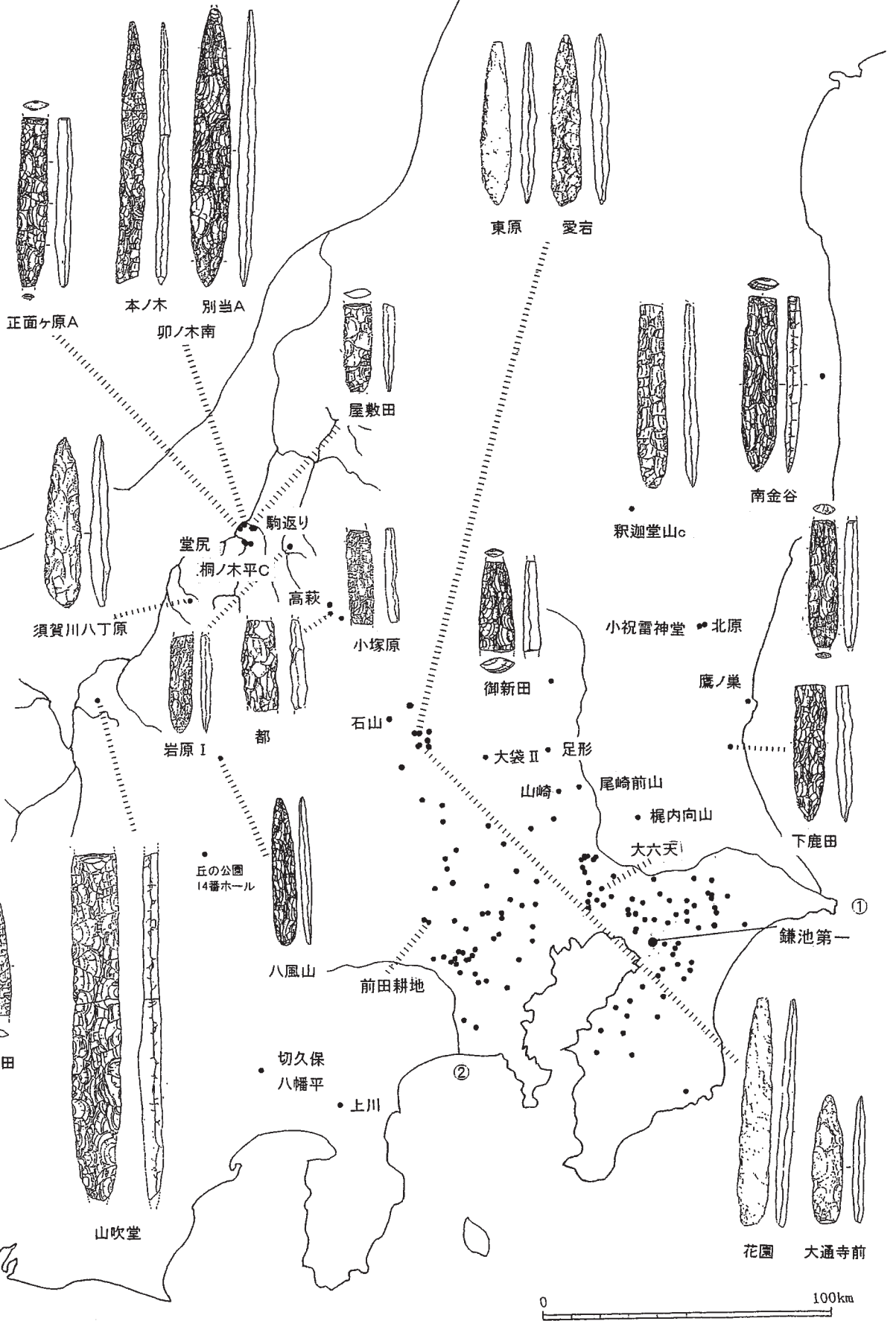
6は二側縁加工のナイフ形石器である。横長剥片を素材としており、切出形を呈する。石材は高原山産の黒曜石と推定される。大きさは長さ2.7cm、幅1.4cm、厚さ0.8cm、重さ2.45gを測り、小型の部類に属する。7は、下総Ⅱc期の半両面加工の小型尖頭器である。表面に比較的急角度な加工が全面に、裏面に平坦な加工が部分的にみられる。大きさは4.0cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm、重さ3.79gでメノウ質の珪質頁岩製である。8については一応ナイフ形石器としたが基部

破片のため明確ではなく、周辺加工の尖頭器の可能性もある。硬質頁岩製であり、大きさは長さ2.6cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ1.68cmとなっている。9は縄文時代草創期前半（隆起線文土器併行期）の有舌尖頭器である。先端部はガジリ（耕作に伴う新たな損傷）により欠損している。細身で、精緻な二次加工が両面に施されている。また、二側縁は鋸歯縁を呈しており、有舌尖頭器の中でも最盛期の段階（「小瀬ヶ沢型」）に属するものと考えられる（芹沢1966）。石材は硬質頁岩であり、大きさは長さ4.2cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重さ2.78gを測る。

### 3 関連資料との対比

今回紹介した資料のうち、帰属時期が明確ものは第一遺跡の本ノ木型尖頭器1点（第3図1）、有槌尖頭器の関連資料2点（第3図3・4）、第二遺跡の小型尖頭器（第3図7）・有舌尖頭器（第3図9）各1点であるが、不明なものも含め、おおむね鋤・鍬等の簡易な農具による耕作の及ぶ、立川ローム層の中でも比較的浅い層準（ソフトロームより上部）の遺物であるものと考えられる。

これらの資料群の中では、本ノ木型尖頭器（以下「本ノ木型」）が特筆される。本ノ木型尖頭器は、本県を代表する石器であり、旧石器時代の終末期に登場する細身の尖頭器の中で、著しく狭長で両側縁が平行するものであり、特異な形態から「両側縁並行柳葉形尖頭器」とも呼ばれている。本ノ木型の名称は新潟県中魚沼郡津南町本ノ木遺跡を標式としており、関連遺跡は南関東に集中する。遺跡の分布域については従前ど



第5図 「本ノ木型」 関連遺跡分布

おりであり、関東、中部、北陸に局限される。関東では、かつての鬼怒川（近世初頭以前）と相模川にはさまれた区域に遺跡が集中しており、一種の核地帯を形成している。特に、千葉県は、全国屈指の遺跡数を誇り、広範に遺跡が分布している。

ちなみに、今回の追加資料により、本ノ木型尖頭器の関連遺跡は、都合174所（福島県1、新潟県9、長野県3、岐阜県3、山梨県3、静岡県1、茨城県8、栃木県3、群馬県14、千葉県73、埼玉県16、東京都32、神奈川県8）に達した。

中には、先の本ノ木遺跡や東京都あきる野市前田耕地遺跡のように尖頭器類の出土量が1,000点を超える大規模な製作遺跡もあるが、単独出土が大半であり、総量が10点を超えるような、まとまった資料は、これまで9例（新潟県本ノ木遺跡、東京都前田耕地遺跡、千葉県富里市南大溜袋遺跡・柏市元割遺跡・千葉市弥三郎第2遺跡・同宮野木第1遺跡・四街道市木戸先遺跡・成田市大安場Ⅱ遺跡、神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群C区）に過ぎない。

遺物については、尖頭器、ノッチ、石斧、搔器、削器、有溝砥石、石錐、楔形石器、石鏃（本ノ木遺跡、吉岡遺跡群C区、なすな原遺跡、南大溜袋遺跡）等が報じられているが、遺物の多寡にかかわらず尖頭器とシャフトの製作に関わるノッチが基本形となっている。さしずめ狩場の装備といえよう。

前田耕地遺跡を除けば、基本的に初期の製作工程（素材生産の段階）が欠落しており、本ノ木遺跡にしても、原石や自然面を有する資料がみられず同様の状況にある。すなわち大半の遺跡は、折損後の再加工（先端部・基部）の段階にある。再加工は、基部を残し長さが減じる図式が一般的であり、特に石材消費地の千葉県では顕著である。

千葉県は、広大な関東平野の中にあって、当時は基本的に猟場であり、かつ消費地であった。一般に消費地では、有効利用（再加工・転用）、多様な石材及び小型化が地域特性となっている。このような地域特性は、県内の出土資料によくあらわれている。

また、本ノ木型の搬入形態が、一部の例外を除いて製品であること、分布域が、関東を中心として局所的であること、関連遺跡が新潟南部・群馬北部を扇のかなめとして南関東の平野部に向かって放射状に分布していることから、本ノ木型の供給ルートは、ほぼ一方方向に固定化されていたものと推測される。

## おわりに

今回資料紹介した資料は、かつて小林清隆によって千葉市若葉区鎌池付近で採集された旧石器時代～縄文時代初頭の石器群である。採集地は未周知の遺跡であり、その周辺でも旧石器時代の遺跡はあまり発見されていない。かかる現状を踏まえて、本稿では、当該資料の紹介と若干の考察を試み、かつ地域的な空白を補填した。

## 注

- 1) 第1図に使用した地図は、国土地理院2019年発行の25,000分の1地形図「千葉東部 NI-54-19-15-1」を使用した。
- 2) 第2図に使用した地図は、柏書房から1988年に発行された『明治前期関東平野地誌図集成』の、25,000分の1「千葉東部」を使用した。

## 引用・参考文献

- 湖口淳一 1997『千葉市原町遺跡群発掘調査報告書Ⅲ 根崎遺跡』（財）千葉市文化財調査協会
- 斉藤 毅ほか 1991『和良比遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
- 渋谷興平ほか 1987『四街道市四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
- 芹沢長介 1966「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』第2集 pp.1-68
- 田村隆・橋本勝雄 1984『房総考古学ライブラリー1 先石器時代』財団法人千葉県文化財センター
- 橋本勝雄 2012「本ノ木型尖頭器総論－槍と植刃器のかかわり－」『研究紀要』第9号 pp.1-30 財団法人印旛郡市文化財センター
- 橋本勝雄 2017「<研究>佐倉市太田・大篠塚遺跡出土の旧石器時代遺物の再評価－有榧尖頭器に関する一考察－（上）」『佐倉市史研究』第30号 pp.22-49 佐倉市総務部総務課市史編さん担当 佐倉市
- 橋本勝雄 2018「<研究>佐倉市太田・大篠塚遺跡出土の旧石器時代遺物の再評価－有榧尖頭器に関する一考察－（下）」『佐倉市史研究』第31号 pp.18-31 佐倉市総務部総務課市史編さん担当 佐倉市
- 橋本勝雄 2020「V.関東における本ノ木型尖頭器の生産と消費－東京都前田耕地遺跡の位置づけ－」『市立市川考古博物館 館報』第47号 pp.29-40
- 古内 茂 2000「東寺山貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県
- 本保弘文 2000『東金御成街道史跡散歩』暁印書館